

温泉だより

芥川龍之介

青空文庫

……わたしはこの温泉宿やどにもう一月ひとつきばかり滞たいざい在ざいしています。が、肝腎かんじんの「風景」はまだ一枚も仕上しあげません。まず湯にはいつたり、講談本を読んだり、狭い町を散歩したり、——そんなことを繰り返して暮らしているのです。我ながらだらしのないのには呆あきれますが。（作者註。この間に桜の散っていること、鶺鴒せきりいの屋根へ来ること、射しやてき的に七円五十銭使ったこと、田舎芸者いなかげいしやのこと、安来節やすきぎふし芝居に驚いたこと、蔵狩くらびがりに行ったこと、消防の演習を見たこと、墓がまくち口を落したことなどを記しるせる十数行あり。）それから次手ついでに小説じみた事実談を一つ報告しましょう。もつともわたしは素人しろうとですから、小説になるかどうかはわかりません。ただこの話を聞いた時にちやうど小説か何か読んだような心もちになったと言うだけのことです。どうかそのつもりで読んで下さい。

何なんでも明治三十年代に萩野半之丞はぎのはんのじやうと言う大工だいくが一人、この町の山寄やまよりに住んでいました。萩野半之丞はぎのはんのじやうと言う名前だけ聞けば、いかなる優男やさおとこかと思うかも知れません。しかし身の丈六尺五寸、体重三十七貫と言うのですから、太刀山たちやまにも負けない大男だったので。いや、恐らくは太刀山たちやまも一いち籌ちゆうを輸ゆするくらいだったのでしょう。現に同じ宿やどの客の一人、——「な」の字さんと言う（これは国木田独歩くにきだどつぽの使った国粹こくすい的省略法に従った

のです。薬種問屋の若主人は子供心にも大砲よりは大きいと思つたと言ふことです。同時にまた顔は稲川にそっくりだと思つたと言ふことです。

半之丞は誰に聞いて見ても、極人の好い男だった上に腕も相当にあつたと言ふことです。けれども半之丞に関する話はどれも多少可笑しいところを見ると、あるいはあらゆる大男並に総身に智慧が廻り兼ねと言ふ趣があつたのかも知れません。ちよつと本筋へはいる前にその一例を挙げておきましょう。わたしの宿の主人の話によれば、いつか夙の烈しい午後、この温泉町を五十戸ばかり焼いた地方的大火のあつた時のことです。半之丞はちよつと一里ばかり離れた「か」の字村のある家へ建前か何かに行つていました。が、この町が火事だと聞くが早いか、尻を端折る間も惜しいように「お」の字街道へ飛び出したそうです。するとある農家の前に栗毛の馬が一匹繫いである。それを見た半之丞は後で断れば好いとも思つたのでしよう。いきなりその馬に跨つて遮二無二街道を走り出しました。そこまでは勇ましかつたのに違いありません。しかし馬は走り出したと思つと、たちまち麦畑へ飛びこみました。それから麦畑をぐるぐる廻る、鍵の手に大根畑を走り抜ける、蜜柑山をまっ直に駈け下りる、——とうとうしまいには芋の穴の中へ大男の半之丞を振り落したまま、どこかへ行つてしまいました。こう言う災難に遇つたのですから、勿論火

事などには間に合いません。のみならず半之丞は傷だらけになり、這うようにこの町へ帰って来ました。何でも後で聞いて見れば、それは誰も手のつけられぬ盲馬だったと言うことです。

ちようどこの大火のあつた時から二三年後になるでしょう、「お」の字町の「た」の字病院へ半之丞の体を売つたのは。しかし体を売つたと云つても、何も昔風に一生奉公の約束をした訣ではありません。ただ何年かたつて死んだ後、死体の解剖を許す代りに五百円の金を貰つたのです。いや、五百円の金を貰つたのではない、二百円は死後に受けとることにし、差し当りは契約書と引き換えに三百円だけ貰つたのです。ではその死後に受けとる二百円は一体誰の手へ渡ると言うのと、何でも契約書の文面によれば、「遺族または本人の指定したるもの」に支払うことになっていました。実際またそうでもしなければ、残金二百円云々は空文に了るほかはなかつたのでしよう、何しろ半之丞は妻子は勿論、親戚さえ一人もなかつたのですから。

当時の三百円は大金だつたでしょう。少くとも田舎大工の半之丞には大金だつたのに違いありません。半之丞はこの金を握るが早いか、腕時計を買つたり、背広を拵えたり、「青ペン」のお松と「お」の字町へ行つたり、たちまち豪華を極め出しました。「青ペ

ン」と言うのは亜鉛屋根に青ペンキを塗った達磨茶屋です。当時は今ほど東京風にならず、軒には糸瓜なども下っていたそうですから、女も皆田舎じみていたことでしょう。が、お松は「青ペン」でもとにかく第一の美人になっていました。もつともどのくらい美人だったか、それはわたしにはわかりません。ただ鮎屋に鰻屋を兼ねた「お」の字亭のお上の話によれば、色の浅黒い、髪の毛の縮れた、小がらな女だったと言うことです。

わたしはこの婆さんにいろいろの話聞かせて貰いました。就中妙に気の毒だったのはいつも蜜柑を食っていなければ手紙一本書けぬと言う蜜柑中毒の客の話です。しかしこれはまたいつか報告する機会を待つことにしましょう。ただ半之丞の夢中になっていたお松の猫殺しの話だけはつけ加えておかなければなりません。お松は何でも「三太」と云う烏猫を飼っていました。ある日その「三太」が「青ペン」のお上の「張羅の上へ粗忽をしたのです。ところが「青ペン」のお上と言うのは元来猫が嫌いだったものですから、苦情を言うの言わないではありません。しまいには飼い主のお松にさえ、さんざん悪態をついたそうです。するとお松は何も言わずに「三太」を懐に入れたまま、「か」の字川の「き」の字橋へ行き、青あおと澱んだ淵の中へ烏猫を抛りこんでしまいました。それから、——それから先は誇張かも知れませんが、とにかく婆さんの話によれば、発

頭人のお上は勿論「青ペン」中の女の顔を蚯蚓腫れだらけにしたと言うことです。

半之丞の豪奢を極めたのは精々一月か半月だっただしよう。何しろ背広は着て歩いていても、靴の出来上つて来た時にはもうその代も払えなかつたそうです。下の話もほんとうかどうか、それはわたしには保証出来ません。しかしわたしの髪を刈りに出かける「ふ」の字軒の主人の話によれば、靴屋は半之丞の前に靴を並べ、「では棟梁、元値に買つておくんさい。これが誰にでも穿ける靴ならば、わたしもこんなことを言いたくはありません。が、棟梁、お前さんの靴は仁王様の草鞋も同じだから」と頭を下げて頼んだと言うことです。けれども勿論半之丞は元値にも買うことは、出来なかつたのでしよう。この町の人々には誰に聞いて見ても、半之丞の靴をはいているのは一度も見かけなかつたと言っていますから。

けれども半之丞は靴屋の払いに不自由したばかりではありません。それから一月とたたないうちに今度はせつかくの腕時計や背広までも売るようになって来ました。ではその金はどうしたかと言えば、前後の分別も何もなしにお松につきこんでしまったのです。が、お松も半之丞に使わせていたばかりではありません。やはり「お」の字のお上の話によれば、元来この町の達磨茶屋の女は年々夷講の晩になると、客をとらずに内輪ばかりで

三味線しやみせんを弾ひいたり踊おどったりする、その割わり前まえの算段さんだんさえ一時はお松には苦くしかったそうです。しかし半之丞もお松にはよほど夢中むちゆうになつていたのでしよう。何しろお松は癩かんしやを起おこすと、半之丞の胸むなぐらをとつて引きずり倒たおし、麦酒ビール罎びんで擲なぐりなどもしたものです。けれども半之丞はどう言う目に遇あつても、たいていは却かえつて機嫌きげんをとつていました。もつとも前後ぜんごにたつた一度、お松がある別荘番せがれの倅せがれと「お」の字町へ行つたとか聞いた時には別人べにんのように怒おこつたそうです。これもあるいは幾分か誇張くわちやうがあるかも知れません。けれども婆ばあさんの話したまを書けば、半之丞は（作者註。田園でんえん的てきしつと嫉妬しやくとの表白ていひとしてさもあらんとは思おもわるれども、この間あいだに割愛わあいせざるべからざる数すうぎ行ぎやうあり）と云うことです。前に書いた「な」の字さんの知しつてゐるのはちやうどこの頃の半之丞でしよう。当時たうじまだ小学校の生徒せいとだつた「な」の字さんは半之丞と一しよに釣つりに行つたり、「み」の字峠とうげへ登のぼつたりしました。勿論半之丞がお松に通かよいつめていたり、金かねに困こつていたりしたことは全然「な」の字さんにはわからなかつたのでしよう。「な」の字さんの話は本筋にはいざれも関係かんけいはありません。ただちよつと面白おもしろかつたことには「な」の字さんは東京へ歸かへつた後のち、差出さしだし人ひと萩野半之丞はぎのはんのじやうの小包こふみを一つ受けとりました。嵩かさは半紙はんしの一しめくらいある、が、目かたは莫迦ばかに軽かろい、何かと思つてあけて見ると、「朝日」の二十入りの空あき箱あはに水

を打つたらしい青草がつまり、それへ首筋の赤い螢ほたるが何匹もすがつていたと言うことです。もつともそのまた「朝日」の空き箱には空気を通わせるつもりだったと見え、べた一面にきり錐の穴をあけてあつたと云うのですから、やはり半之丞らしいのには違いないのですが。

「な」の字さんは翌よくとし年の夏にも半之丞と遊ぶことを考えていたそうです。が、それは不幸にもすつかり当あてが外はずれてしまいました。と言うのはその秋の彼岸ひがんの中ちゆうにち日、萩野半之丞は「青ペン」のお松に一通の遺書いしよを残したまま、突然風ふうがわ変りの自殺をしたのです。ではまたなぜ自殺をしたかと言えば、——この説明はわたしの報告よりもお松宛あての遺書に譲ることになりました。もつともわたしの写したのは実物の遺書ではありません。しかしわたしの宿の主人が切抜帖きりぬぎちように貼はつておいた当時の新聞に載っていたものですから、大体間違いはあるまいと思えます。

「わたくし儀ぎ、金がなければお前様まえさまとも夫婦になれず、お前様の腹の子の始末しまつも出来ず、うき世がいやになり候そうろうあいだ、死んでしまいます。わたくしの死がいは「た」の字病院へ送り、（向うからとりに来てもらつてもよろしく御座候ござ。）このけい約書とひきかえに二百円おもらい下され度たく、その金で「あ」の字の旦那だんな（これはわたしの宿の主人です。）のお金を使いこんだだけはまどう「償つぐのう？」ように頼み入り候。「あ」の字の旦那にはま

ことに、まことに面目めんぼくありません。のこりの金はみなお前様のものにして下され。一人旅うき世をあとに半之丞。「これは辞世じせでしょう。」おまつどの。」

半之丞の自殺を意外いがいに思ったのは「な」の字さんばかりではありません。この町の人々もそんなことは夢にも考えなかつたと言ふことです。若し少しでもその前に前ぜん兆ちようらしいことがあつたとすれば、それはこう言う話なんだけでしよう。何でも彼岸前のある暮れがた、「ふ」の字軒の主人は半之丞と店の前の縁えん台たいに話していました。そこへふと通りかかつたのは「青ペン」の女の一人です。その女は二人の顔を見るなり、今しがた「ふ」の字軒の屋根の上を火の玉が飛んで行つたと言ひました。すると半之丞は大真面目おおまじめに「あれは今おらが口から出て行つただ」と言つたそうです。自殺と言ふことはこの時にもう半之丞の肚はらにあつたのかも知れませんか。しかし勿論もちろん「青ペン」の女は笑つて通り過ぎたと言ふことです。「ふ」の字軒の主人も、——いや、「ふ」の字軒の主人は笑ううちにも「縁起えんぎでもねえ」と思つたと言つていました。

それから幾日もたたないうちに半之丞は急に自殺したのです。そのまた自殺も首を縊くつたとか、喉のどを突いたとか言うのではありません。「か」の字川の瀬の中に板いた囲がこいをした、「独鈷とつこの湯」と言う共同風呂がある、その温泉の石槽いしぶねの中にまる一晚沈んでいた揚句あげく、

心臓麻痺しんぞうまひを起して死んだのです。やはり「ふ」の字軒の主人の話によれば、隣となりの煙草屋の上かみさんが一人、当夜かれこれ十二時頃に共同風呂へはいりに行きました。この煙草屋の上さんは血の道か何かだったものですから、宵のうちにもそこへ来ていたのです。半之丞はその時も温泉の中に大きな体を沈めていました。が、今もまだはいっている、これにはふだんまつ昼間びるまでも湯巻ゆまき一つになったまま、川の中の石いし伝つたいに風呂へ這はって来る女丈夫じよじょうぶもさすがに驚いたと言うことです。のみならず半之丞は上さんの言葉にうんだともつぶれたとも返事をしない、ただ薄暗い湯気ゆげの中にまつ赤になった顔だけ露あわしている、それも瞬またたき一つせずじつと屋根裏の電燈を眺めていたと言うのですから、無気味ぶきみだったのに違いありません。上さんはそのために長湯ながゆも出来ず、そうそう々風呂を出てしまつたそうです。

共同風呂のまん中には「独鈷とっこの湯」の名前を生じた、大きい石の独鈷があります。半之丞はこの独鈷の前にちゃんと着物を袖そでだたみにし、遺書は側そばの下駄げたの鼻緒はなおに括くくりつけてあつたと言うことです。何しろ死体は裸のまま、温泉の中に浮いていたのですから、若しその遺書でもなかつたとすれば、恐らくは自殺かどうかさえわからずにしまつたことでしょう。わたしの宿の主人の話によれば、半之丞がこう言う死にかたをしたのは苟いくも「た」の字病院へ売り渡した以上、解剖かいぼう用の体に傷をつけてはすまないと思つたからに違ひな

いそうです。もつともこれがあの町の定説と言う訣わけではありません。口の悪い「ふ」の字軒の主人などは、「何、すむやすまねえじゃねえ。あれは体に傷をつけては二百両りょうにならねえと思つたんです。」と大いに異説を唱となえていました。

半之丞の話はそれだけです。しかしわたしは昨日きのうの午後、わたしの宿の主人や「な」の字さんと狭苦しい町を散歩する次手ついでに半之丞の話をしましたから、そのことをちよつとつけ加えましょう。もつともこの話に興味を持つていたのはわたしよりもむしろ「な」の字さんです。「な」の字さんはカメラをぶら下げたまま、老眼鏡ろうがんきょうをかけた宿の主人に熱心にこんなことを尋ねていました。

「じゃそのお松まつと言う女はどうしたんです？」

「お松ですか？ お松は半之丞の子を生んでから、……」

「しかしお松の生んだ子はほんとうに半之丞の子だったんですか？」

「やっぱり半之丞の子だったですな。瓜二つうりと言つても好よかったですから。」

「そうしてそのお松と言う女は？」

「お松は「い」の字と言う酒屋に嫁よめに行つたです。」

熱心になつていた「な」の字さんは多少失望したらしい顔をした。

「半之丞の子は？」

「連れっ子をして行つたです。その子供がまたチブスになって、……」

「死んだんですか？」

「いいや、子供は助かつた代りに看病かんびょうしたお松わすらが患わづらいついたです。もう死んで十年になるんですが、……」

「やつぱりチブスで？」

「チブスじゃないです。医者は何とか言つていたのですが、まあ看病疲れですな。」

ちようどその時我々は郵便局の前に出ていました。小さい日本建にほんだての郵便局の前には若楓わかへが枝えだを伸のばしています。その枝に半ば遮さえぎられた、埃ほこりだらけの硝子窓がらすの中にはずんぐりした小倉服こくらふくの青年が一人、事務とを執とつているのが見えました。

「あれですよ。半之丞の子と言うのは。」

「な」の字さんもわたしも足を止めながら、思わず窓の中を覗のぞきこみました。その青年が片頬かたほおに手をやつたなり、ペンが何かを動かしている姿は妙に我々には嬉うれしかったのです。しかしどうも世の中はうっかり感心も出来ません、二三歩先に立った宿の主人は眼鏡めがね越しに我々を振り返ると、いつか薄笑うすえいを浮かべているのです。

「あいつももう仕かたがないのですよ。『青ペン』通いばかりしているのですから。我々はそれから「き」の字橋まで口をきかずに歩いて行きま^ゆした。……」

(大正十四年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：大野晋

1999年1月17日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

温泉だより

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>